１　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。　　〈大分大〉二〇二一年度出題

　ルネサンス期のユマニスト（ヒューマニスト・人文主義者）たちが、どのような人間観を持っていたか、どのような人間像を理想としていたか、これを簡単に指示できないのは残念です。しかし、ユマニストたちは、聖書に対して加えられた誤った解釈を、聖書の原典批評によって発見すればするほど、キリストの精神から見れば、められた人間としか言いようのない人々の手が働いていることと、その結果、更に多くの人々を歪めさせるような制度や言動が生れていることを感じたらしく思われます。また、ギリシャ・ローマの学芸に触れて、中世キリスト教以前の世界に、思いもかけぬ深い思想や、明るい人間感情や、な生活があったことを知ったユマニストは、自分の周囲の人々が、あたかもをはめられて、人間本来の姿勢を失っているばかりか、歪んだのままで固まってしまいかねないことを感ぜざるを得ませんでした。

　ユマニストの王者と言われるオランダ生れの神学者デシデリウス・エラスムスは、《キリスト教の復元》ということを申しまして、その生涯の仕事をこれに沿って発展させましたし、その影響は、全ヨーロッパのユマニスム（ヒューマニズム・人文主義）の発生と成長とにあずかって力がありました。このエラスムスは、中世伝来のキリスト教会の制度および指導法が、人間を著しく歪めていることを感じ、キリスト教本来の面目への復帰を熱望していたのでした。エラスムスは、それまでの聖書解釈のを指摘したり、容赦なくキリスト教会の制度の欠陥や聖職者たちの行動を批判しましたので、カトリック教会中の頑迷な人々からは１白眼視されるようになりました。そして、エラスムスよりもやや遅れてこの世に生れ、公然とカトリック教会に反旗をひるがえしてプロテスタントの教会（新教）のア礎を築き、ルネサンス時代の最も重要な運動の一つである宗教改革の祖となったマルチン・ルッターの同類と見なされて、「エラスムスが卵を産み、ルッターがこれをした」とまで、エラスムスは罵られてしまいました。エラスムスとしては、あくまでもカトリック教徒として、カトリックの司祭として、キリスト教会の歪みをそうとしただけなのです。しかし、宗教改革運動の初期において、エラスムスを首領とし、その主張に賛成するユマニストたちと、プロテスタント（新教徒）とが、手を握っていたような感じを与えたのも無理ならぬことでした。ともに、それまでのカトリック教会への批判を行ったからです。しかし、エラスムスは、人間を歪めるものを正しくしようとしたのに対し、ルッターは、人間を歪めるものを一挙に抹殺打倒しようとしたのでした。前者は、終始一貫、批判しし解明し通すだけですが、後者は、批判し怒号し格闘して、敵を倒そうとしたのです。ルッターの出発点には、「エラスムスが産んだ卵を孵した」と言われるくらい、ユマニスムに近いものがあったに違いありませんが、キリストの心に帰るために、同じキリストの名を掲げて、意見の違うキリスト教徒（この場合は旧教徒）と闘争するという行動に出て、ヨーロッパに幾多の非キリスト教徒的な暴状を誘発するような事態を作ってしまいました。そして、カトリック教徒の側には、ルッターから見れば《生ぬるい》エラスムスの批判までを２白い眼で見て、新しい時代のイ息吹きを窒息させることをもって唯一の解決法と考えていた人々もいましたから、そういう人々にも、ルネサンス期の血みどろな宗教戦争の責任を負ってもらわねばならぬことは当然です。しかし、もしルッターが、エラスムスと終始一貫手を握り、先輩としてのエラスムスの批判のウイハツを継ぎ、これを更に世に広く強くめたら、また同じ志の人々の養成に尽したら、３あのような悲惨事は起らなかったかもしれません。

　ユマニスト（ヒューマニスト・人文学者）は、批判をするだけで、現実を変える力を持ち合わせないし、ユマニスム（ヒューマニズム・人文主義）というものは、所詮無力なものだなどと言われます。しかし、終始一貫批判し通すことは、決して生やさしいことではありませんし、現実を構成する人間の是正、制度の矯正を着実に行うことは、現実を性急に変えようとしてさまざまな利害関係（階級問題・政治問題）と結びつき、現実変革の方法に闘争的暴力を導入して多くの人々を苦しめることよりも、はるかにむつかしいことだと思います。Ａ私のいうユマニスムは、一見無力に見えましょうが、決して無力ではないはずです。ルネサンス期にお互いに血を流し合った新旧両教会の対立は、現在でも残っているとは言えますが、それは、単なる教義の上での対立であって、現在、新教徒（プロテスタント）と旧教徒（カトリック）とが銃砲を撃ち合って殺し合うというような対立ではなくなっています。人々は、同じキリストの名のもとで、キリスト教徒がお互いに殺し合うことがいかに愚劣であるかということを知っているからです。そして、こうした愚劣さや非キリスト教徒的な行為や非人間的な激情をおさえる力に自覚を与えてくれたものは、ユマニスムの隠れた、地味な働きにほかなりますまい。現在、人々は、宗教問題で戦争を起すことはしない代りに、経済問題・思想問題で戦争を起しかねません。しかし、もしユマニスムが今なお生き続けているとするならば、必ずいつか、人々は、こうした諸問題のために争うことも愚劣だと観ずることでしょう。経済も政治も思想も、人間が正しく幸福に生きられるようにするためにあるという根本義を、必ず人々は悟ることでしょう。ユマニスムは無力のように見えてもよいのです。ただ、我々が、この無力なユマニスムが行い続ける批判を常に受け入れ、この無力なユマニスムを圧殺せずに、守り通す努力をしたほうが、殺し合って、力の強い者だけが生き残るというジャングルのを守ろうとするよりも、はるかにむつかしいにしても、はるかにとくだということだけは確かなように思います。

（出典：渡辺一夫「ある神学者の話」、ちくま日本文学全集『渡辺一夫』、筑摩書房、一九九三年より抜粋・一部改変）

問１　傍線部ア～ウのカタカナの語は漢字に、漢字の語は読み仮名に、それぞれ直せ。

問２　傍線部１「白眼視」する、傍線部２「白い眼で見」るとあるが、その意味を簡潔に説明せよ。

問３　傍線部３「あのような悲惨事」とあるが、その指示内容を本文中から一六字（句読点を含む）で抜き出せ。

問４　エラスムスとルッターとの共通点と相違点とを次のような形でまとめる時、空欄を二〇字以内（句読点を含む）で埋めよ。

いずれもそれまでのカトリック教会への批判を行ったが、エラスムスが批判に終始していたのに対し、ルッターは〔　　　　　　　　　　　　　　〕。

◎ 問５　傍線部Ａ「私のいうユマニスムは、一見無力に見えましょうが、決して無力ではないはずです」とあるが、筆者のいう「ユマニスム」にはどのような「力」があるのか、次のような形でまとめる時、空欄を六〇字以内（句読点を含む）で埋めよ。

現実を変革するために闘争的暴力を導入し多くの人を苦しめるのではなく、〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕力。

【解答と採点基準】

問１　ア＝いしずえ　　イ＝いぶ　　ウ＝衣鉢

問２　冷淡でよそよそしい態度をとること。

問３　ルネサンス期の血みどろな宗教戦争

問４　批判だけでなく、闘争して敵を倒そうとした（20字）

問５　Ａ現実を構成する人間の是正、制度の矯正を着実に行うために、Ｂ終始一貫批判をし通すことで、Ｃ人々を正しく幸福な生へと近づける（58字）

Ａ＝３〔「人間の是正」「制度の矯正」「着実」という語がなければそれぞれ減点１。〕

Ｂ＝４〔「批判し通す」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝３〔「正しく幸福な生」という内容がなければ不可。〕